

原著

産後の摂生に関する民間的ケアの母－娘における世代間伝承

Transmission of Folk Care Advice from Mother to Daughter Concerning Health Care after Childbirth

北里大学大学院博士後期課程 (Graduate School of Nursing, Doctoral program, Kitasato University)

長鶴美佐子 (Misako Nagatsuru)

北里大学 (School of Nursing, Kitasato University)

高橋 真理 (Mari Takahashi)

宮崎県立看護大学 (Miyazaki Prefectural Nursing University)

宮里 和子 (Kazuko Miyasato)

日本母性看護学会 第2巻 第2号

抜 刷

平成 14 年 3 月 31 日

原著

産後の摂生に関する民間的ケアの母－娘における世代間伝承

Transmission of Folk Care Advice from Mother to Daughter Concerning Health Care after Childbirth

北里大学大学院博士後期課程 (Graduate School of Nursing, Doctoral program, Kitasato University)

長鶴美佐子 (Misako Nagatsuru)

北里大学 (School of Nursing, Kitasato University)

高橋 真理 (Mari Takahashi)

宮崎県立看護大学 (Miyazaki Prefectural Nursing University)

宮里 和子 (Kazuko Miyasato)

キーワード : 産後の摂生、民間的ケア、世代間伝承

key words : health care after childbirth, folk care advice, transmission between generations

要約

本研究の目的は、「産後の摂生に関する助言」の世代変化と伝承の特徴を明らかにし、民間的ケアの今後の可能性を検討することである。産褥一ヶ月の健康診査に訪れた褥婦122名 (92%) に半構成面接法による調査を実施し、その実母には質問紙法による調査を行い75名 (74%) から回答を得た。実母・褥婦の両世代の回答比較により以下のことが明らかになった。

1. 「産後の摂生に関する助言」は、両世代ともにその実母から受けたものが多く、今後もこの傾向は続くと考えられた。
2. 両世代ともに「休養に関する助言」を受けたものが最も多く、今後もこの助言は実施されるが、「洗髪・入浴に関する助言」は減少する可能性が大きい。
3. 産後の摂生に関する助言は、送り手である実母より受け手である褥婦の方が詳細に記憶しているという特徴が見られた。

以上より「産後の摂生に関する助言」は、今後も実母を中心に行なわれ、褥婦のヘルスプロモーションに大きく関与していくことが示唆された。

abstract : This study investigated the generational change in advice concerning the health care after childbirth, and to examine the likely direction of future changes. Subject pairs consisted of puerperas returning for post natal checkup along with their mothers. Puerperas (n=122, 92%) were surveyed using a semi-structured interview, while their mothers (n=75, 74%) were surveyed by questionnaire. Comparison of information between the mothers and daughters revealed the followings:

1. Both generations had received "Advice concerning health care after childbirth" from their mother in most cases. This tendency is likely to continue in the future.

2. This advice most frequently contained "Advice for rest". This advice is likely to continue, but there was a high possibility that "Advice that bathing and shampooing are prohibited for a certain period after childbirth" might decrease.

3. Characteristically, puerperas as the recipient remembered "Advice concerning health care after childbirth" in greater detail than their mothers as the advisor.

Therefore, it was suggested that "Advice concerning health care after childbirth" would continue to be passed down mainly by mothers, and to be associated with health promotion to puerperas.

I. 緒言

産褥期は、妊娠・分娩による変化の生理的な回復過程ではあるが、短期間にダイナミックな心身の変化が起き、種々の合併症が発症しやすい時期である¹⁾。この時期をいかに過ごすかが今後の健康を方向づけるとする認識は、人々の間に古くより存在し、これが様々な慣習の形で伝えられ実践されてきている。例えば、わが国では産後21日を主とした床上げの慣習²⁾、韓国でも sanhujori という21日間就床などの6つの原則からなる独特な産後のケアシステム³⁾がある。また東南アジアでは yu fai⁴⁾、オーストラリアのミャオ族は nyo dua hli⁵⁾ という産後の保温と安静を促す慣習が存在し褥婦のヘルスプロモーションに影響を与えている。

レイニンガー⁶⁾はこのような「文化的に学習され伝承された非専門的・自然発生的（伝統的）・民俗的（家庭ケア）な知識と技能」によるケアを民間的ケアと定義し、さらにこの民間的ケアを考慮したより専門性の高い看護ケアを文化的ケアとしている。

文化的ケアの研究では、文化的信念が人々の保健行動やヘルスケアにもたらす影響からこのケアの必要性を指摘するもの⁷⁾や、エスノグラフィーにより、その民族に特有な民間的ケアを明らかにし、文化的ケアを探索した報告がある⁸⁾⁹⁾。しかしわが国においては産育習俗の報告¹⁰⁾¹¹⁾にとどまり、文化的ケアの研究はほとんど見られない。

そのため、先に我々は産後の摂生に関する民間的ケアの実態を調査した。結果、褥婦には現在も「床上げ」等の休養や「水」や「目」の使用を摂生させる民間的ケアが行なわれ、実母から娘への伝承が大きく関与していることを確認した¹²⁾。これにより、文化的ケアの必要性が示唆され、この取り組みにおいては母娘間伝承へのアプローチが大きな鍵になると考えられた。

そこで今回は、母娘の世代間伝承に焦点を当て、伝承内容の変化ならびにその特徴から、民間的ケアの今後の可能性を検討し、文化的ケア提供のための一資料とすることを目的とした。

II. 研究目的

産後の摂生に関する助言の世代変化と伝承の特徴を明らかにし、民間的ケアの今後の可能性を検討する。

III. 用語の操作的定義

本研究では「産後の摂生」とは「出産後の健康維持・増進のために、身体に悪いとされることを慎むこと」と定義した。また「助言」は、非専門職者による「助言」を指し、「言葉によって、聞いた事や体験したことを伝え助ける民間的ケアの一方法」とした。

IV. 研究方法

1. 研究デザイン

記述的研究

2. 研究対象

対象者は1999年7月～9月に神奈川県下のベットタウンに位置するK病院で出産し産褥一ヶ月健診に訪れた褥婦132名とその実母(以下母)102名である。

3. 調査方法及び内容

1) 褥婦 (以下娘世代)

産科外来保健指導室において、産褥一ヶ月健診開始前に、口頭及び文書で研究主旨を説明後、同意の得られた褥婦122名(92%)に半構成面接法による聞き取り調査を実施した。主な調査内容は産後の摂生に関する助言の有無、助言者、助言内容とその根拠、助言に対する反応・実践・次世代への伝承意思である。所要時間は約15分、面接内容は褥婦の了解を得て録音した。

2) 母 (以下母世代)

褥婦から了解の得られた母102名を対象に、質問紙調査を実施した。調査項目は母自身が自分の出産の際に受けた産後の摂生に関する助言の有無、助言者、助言内容とその根拠(選択式と自由記述式を併用)、並びに今回の娘への産後の摂生についての助言の有無とその内容(自由記述式)である。なお調査用紙は研究協力依頼書とともに郵送または褥婦の手渡し法で配布し、郵送法で回収した。回収率は75名(74%)である。

4. 分析の方法

母世代と娘世代の比較から世代による変化を調べ、さらに次世代への伝承の可能性を推察した。また母とその娘をカップリングし、今回の娘への「産後の摂生に関する助言」について双方の回答を比較し、「伝承」の特徴について検討した。

V. 結果

1. 対象者の特性

1) 母 (75名)

平均年齢58歳(SD±4.8)、平均子ども数2.5人であった。出身地は関東地方が全体の53%を占めた。施設内出産経験者は85%であった。

2) 褥婦 (122名)

平均年齢29.7歳(SD±4.2)で、初産婦は52%であった。出身地は関東地方が85%で、核家族は85%であった。今回の退院後の生活場所は実家54%、自宅43%で、実家への平均滞在日数は23日であった。産後の手伝い人がいた者は93%で、その内訳は母74%、姑17%であった。

今回母とカップリングできた褥婦(75名)の平均年齢は30歳(SD±4)で、初産婦56%、核家族が88%であった。また退院後を実家で過ごした者は61%で、実母による産後の手伝いは80%であった。

2. 母世代と娘世代の変化

1) 助言の有無

産後の摂生に関する助言を受けた者は、母世代72名(96%)、娘世代114名(93%)であり、両者ともほとんどの者が受けていた。

表1 助言内容の分類

項目	内容例	その他
休養	蒲団を敷いたままで休養する	休養期間は退院後1週間～産後1カ月で、産後21日や床上げまでが最も多い
	産後は家事や外出はせずに休養を取る	
	産後は何もせず休養をとる	
	赤ちゃんの世話だけをし後は休養する	
水を使うこと	水を使ってはいけない	禁止期間は、産後21日(床上げまで)や1カ月が多い
	家事や洗濯等の水仕事はするな	
	水を使うようなことは最小限にする	
	産後の水仕事は控える	
	水場に立つな	
目を使うこと	目を使ってはいけない	禁止期間は、産後21日(床上げまで)や1カ月が多い
	目を使う細かい仕事はするな	
	本や新聞等の細かい活字は読むな	
	テレビは見るな	
	針仕事や編物はしてはいけない	
洗髪・入浴	髪を洗ってはいけない	禁止期間は、産後21日(床上げまで)や1カ月が多い
	風呂に入ってはいけない	
その他	重いものをもってはいけない	
	身体を冷やすな	
	自転車に乗るな など	

2) 助言者 (複数回答)

誰から助言を受けたかについてを両世代で比較した。その結果、母世代は「実母」55名、「近所の人」16名、姑11名の順であったのに対して、娘世代は「実母」91名、「姑」33名、「近所の人」14名の順であり、両世代とも「実母」からが約8割と最も多かった。

3) 助言内容 (複数回答)

助言内容をみると「床上げまでは休養をとる」「産後21日間は蒲団を敷いたままで休養する」などの「休養に関する助言」、「産後は水を使ってはいけない」「水仕事をするな」などの「水を使うことに関する助言」、「針仕事など目を使う仕事をするな」「細かい活字を読むな」など「目を使うことに関する助言」、「産後21日間は洗髪や入浴をしてはいけない」などの「洗髪・入浴に関する助言」、「その他」の5カテゴリーに分類された。(表1) 両世代における各カテゴリーの総数を比較すると、両世代ともに「休養に関する助言」が最も多かった。しかし「洗髪・入浴に関する助言」は、母世代では48名が受けていたのに対して、娘世代では12名と少なかった。(図1・2)

4) 助言の根拠 (複数回答)

助言の根拠は、母世代では「身体の回復(産後の肥立ち)に悪いから」が63名と最も多く、次いで「更年期に影響があるから」29名であった。娘世代の「休養に関する助言」では「更年

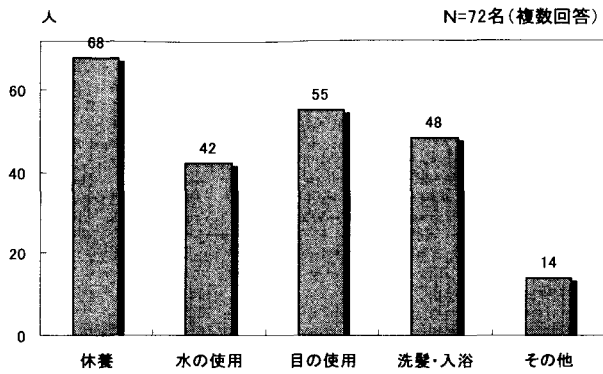


図1 母世代が受けた助言

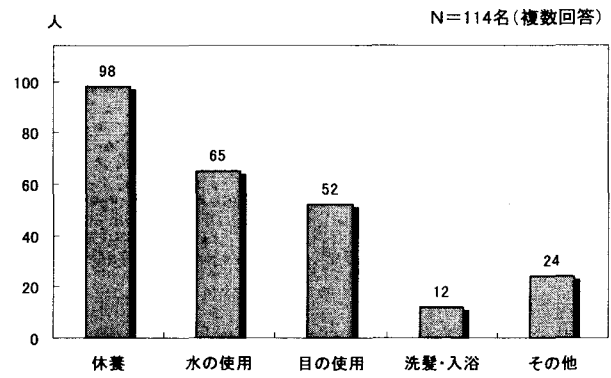


図2 娘世代が受けた助言

期に影響があるから」が64名と最も多く、「身体の回復に悪いから」19名の順であった。

3. 娘世代の助言への対応と次世代への伝承意思

1) 助言の受け止め方

娘世代の中で助言内容を肯定的に受け止めた者は、「休養に関する助言」が76名で、この助言を受けた者の78%に該当した。「目を使うことに関する助言」は35名（67%）、「水を使うことに関する助言」42名（65%）、「洗髪・入浴に関する助言」は6名（50%）であった。

2) 助言の実践

娘世代の中で助言を「(だいたい)守った」者は、「休養に関する助言」では79名（81%）、「目を使うことに関する助言」39名（75%）、「水を使うことに関する助言」37名（57%）であったが、「洗髪・入浴に関する助言」はわずか3名（25%）であった。

3) 次世代への伝承意思

受けた助言について次世代への伝承意思を示した娘は「休養に関する助言」が76名（78%）と最も多く、次いで「水を使うことに関する助言」37名（57%）、「目を使うことに関する助言」29名（56%）、「洗髪・入浴に関する助言」3名（25%）であった。

4. 伝承の特徴—母娘75組の分析—

今回の助言について、伝え手である母と受け手である娘の回答を比較し、その特徴を見た。

1) 助言の有無の一致

回答が一致した母娘は58組（77%）で、不一致であった母娘は17組（23%）であった。不一致のうちの14組は、「娘には助言していない」と「母から助言を受けた」という母娘であった。

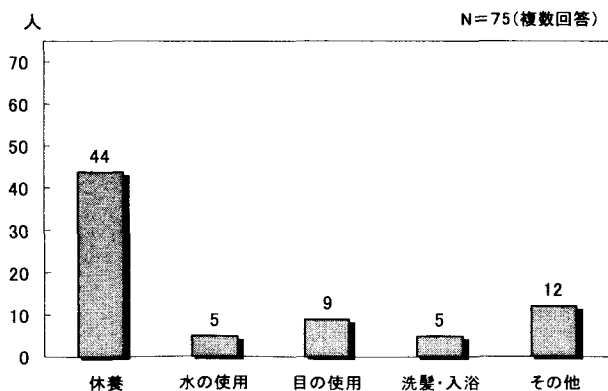


図3 今回の助言 —母の認識—

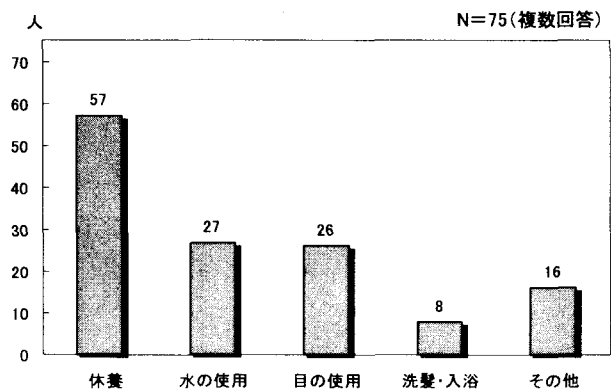


図4 今回の助言 —娘の認識—

2) 助言内容の一致

助言内容の平均項目数は母が1.4、娘は2.3であった。

また母と娘の助言内容を比較したところ、どの内容も伝え手の母よりも受け手の娘の助言数が多く、特に「水を使うこと」と「目を使うこと」に関する助言はその差が大きかった。(図3・4)

また「休養に関する助言」では休養期間まで回答した母は2名(4%)であったのに対し、娘は15名(25%)であった。

VI. 考 察

1. 助言者の特性がもたらす伝承

母・娘世代ともに90%以上が産後の摂生に関する助言を受けており、いずれも「母」から受けている者が最も多かった。これはわが国では実母が妊娠・出産・育児の過程では、情報源または支援者として大きな影響を与えるという松岡の報告¹³⁾と一致する結果であった。

日本の女性は結婚後も独立した存在にならず、気軽に実家の両親の援助を受け、母-娘関係は強く長く堅持されている¹⁴⁾と言われる。このような母-娘関係がもたらす心身のサポートの強さが、今回の助言の多さにも影響していると考えられた。

また母は、産後の手伝い人として助言しやすい立場におり、さらに助言そのものが母自身の経験から行なえるといった助言しやすい条件を備えている。

この母-娘関係や母の持つ「助言のしやすさ」の条件を考えるならば、今後も母による助言は高い割合で実施されていくと思われる。

2. 助言内容の特性から見た伝承

助言の内容は母世代と娘世代ともほぼ同じであった。しかし各内容の助言率は世代で異なっていた。

「休養に関する助言」は両世代ともに最も助言率が高いものであった。産褥期は妊娠・出産からの回復途上にあり、さらに夜間の授乳などで睡眠が寸断されている時期である。褥婦の「産後はやはり疲れた。助言どおりにして良かった」といった言葉からも、休養のニーズの強さと助言に対する評価の高さが伺える。自己の産後体験をもとに、将来次世代に伝承する意思を示した娘は78%と非常に高かった。自らが体験し、その必要性を痛感し次世代に伝承するという図式が「休養の助言」には見られ、これが各世代で高率であった理由の一つであり、次世代へも伝承されていく原動力と考えられた。

一方母世代に多かった「洗髪・入浴に関する助言」は娘世代では明らかに減少していた。母世代は施設内出産への移行期であり、医療職の清潔ケアに対する考え方は依然として慎重であった¹⁵⁾。しかし現在は産褥一日からシャワー浴や洗髪も可能である¹⁶⁾。この時代の変化に伴う入院中の褥婦の過ごし方が、娘世代への助言減少に関与したと考えられる。さらに助言内容からみても「休養の助言」とは異なり、褥婦の清潔へのニーズを阻害するもので、その必要性も実感しにくい助言である。次世代への伝承意思を示した者もわずか25%であり、今後も減少の一途をたどると考えられた。

「水を使うこと」「目を使うこと」に関しては、医学書には見られず産育習俗の色合いが濃い助言といえる。しかし母世代・娘世代ともに助言を受けた者は多く、伝承意思を示した娘世代は半数以上であった。

「水を使うこと」は、民俗学的には、「水場」は「かまど」と同様に昔から女の仕事場とされており¹⁷⁾、産後に家事に従事することへの戒めや、褥婦の身体は「寒」の状態にあり「水との接触を避けるべき」といった中国文化に由来する信仰¹⁸⁾によると解釈できる。

視力への影響も、「妊婦に一時的な視力障害を認めることがあるが分娩終了とともに消失し後遺症を残さない¹⁹⁾」や「妊娠中毒症では眼症状が出現し、時に後遺症が残ることがある」²⁰⁾と医学書には記載されている。

両助言は医学的な根拠は明確でない。しかし、助言を受け入れ、伝承していく人々が少なくない現状がある。すなわちこれらはまさに文化的ケアの必要性を示唆するものである。

3. 伝承に影響する要因

わが国の伝承に影響する要因には、まず先に述べた産褥期の特性と母の関わりを指摘する。褥婦は、妊娠・出産からの回復途上にあり、慣れぬ育児で、心身ともに疲労している状況にある。またそこに手を差し延べるのは自らが体験している母である。これらの要因が医学的根拠の有り無し以前に大きく関与していると思われる。

次に助言の根拠の「更年期に影響するから」についてであるが、これまでのところ産後の摂生と「更年期への影響」の関連は明らかにされていない。しかし今回の結果では「更年期に元気でいられるのは産後十分に休養したから」や「産後に無理をしたので、更年期障害がひどい」という母の言葉から、「産後は大切。無理をしてはいけない」と判断した者が数少なくなかった。人は将来への影響が明らかでない場合、経験者の言葉に従おうとするとともに、なるべくその影響を避けるような、安全な道を取ろうとする心性がある。欧米で伝統的に行われてきた割礼は、医学的理由は認められないという見解が出されている。しかし万が一を考え『安心感』のために割礼を実施する親がいることが報告されている²¹⁾。今回の調査でも「用心するにこしたことがないから」や「気持ちの上で安心するから」という回答があった。このような精神的安寧への欲求も、助言の受け入れや次世代への伝承を促進している重要な要因であると考えた。

最後に「伝承の特徴」を考察する。今回の結果では助言を伝えた側よりも受けた側の方がより詳細に記憶している点が明らかであった。調査方法の違いによる限界があるが、娘側は休養期間までを詳細に記憶し、その内容を真摯に受け止めている様子が伺える。

以上から、産褥の摂生に関する助言は今後も伝承され、褥婦の行動に影響を与えられられた。

4. 本研究の限界

今回の調査における母世代と娘世代の比較には、想起の程度や調査方法の違いによる限界がある。また調査地の地域性が助言内容に影響している点も否めない。

VII. 結論

今回は母娘における世代の調査により、「産後の摂生に関する助言」の世代間伝承の変化と特徴を明らかにし、その将来性を探った。その結果次のことが明らかとなった。

1. 「産後の摂生に関する助言」は、両世代ともにその実母から受けたものが多く、今後もこの傾向は続くと考えられた。
2. 両世代ともに「休養に関する助言」を受けたものが最も多く、今後もこの助言は実施されるが、「洗髪・入浴に関する助言」は減少する可能性が大きい。

3. 産後の摂生に関する助言は、送り手である実母より受け手である褥婦の方が詳細に記憶しているという特徴が見られた。

以上より、今後も「産後の摂生に関する助言」は実母を中心に行なわれ、褥婦のヘルスプロモーションに大きく関与していくと思われた。

今回の研究は、「産後の摂生に関する助言」において、医学的根拠の有無に関係なく民間的ケアを受け入れ、伝えようとする人々が決して少なくはないことを実感させるものであった。人と人との信頼関係は、相手の価値観を理解し、尊重しようという姿勢からはじまり、看護者にとってはこの姿勢を持つことが重要だとされている²²⁾。今後は人々のこのビリーフをどのように理解し、ケアに取り入れていくかが大きな課題になると思われる。

最後に本研究を行うにあたり、調査に快くご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 武谷雄二編集：新女性医学体系32産褥，中山書店，3-11，2001
- 2) 恩賜財団母子愛育会編，日本産育習俗資料集成－出産－，第一法規出版，1974
- 3) Won-whe Kim, MD:Femal Psychosomatic Disorders in Korea-Unique Medical Entities with Its Cultural Background, 女性心身医学, 17-18, 2001
- 4) Pranee L.Rice, Charin Nalsook, Lyndsey E.Watson :The experiences of postpartum hospital stay and returning home among Thai mothers in Australia, Midwifery, 15(1), 47-57, 1999
- 5) Rice PL:Nyo dua hli-30 days confinement : traditions and changed childbearing beliefs and practices among Hmong women in Australia, Midwifely, 16(1), 22-34, 2000
- 6) マデリンM. レイニンガー著，稲岡文昭監訳：レイニンガー看護論文化ケアの多様性と普遍性，医学書院，41，1995
- 7) Bette A.Ide, Turkan Sanli:Health Beliefs and Behaviors of Saudi Women, Women & Health, 19(1), 97-113, 1992
- 8) 前掲4) p47-57
- 9) 前掲5) p22-34
- 10) 鎌田久子，宮里和子，菅沼ひろ子他著：日本人の子産み・子育て－いま・むかし－，勁草書房，122-130，1990
- 11) 緒方由香，西村正子：産育習俗第12回－熊本県水俣市の調査－，ペリネイタルケア，17(6)，81-87，1998
- 12) 長鶴美佐子，宮里和子：褥婦の動静に関する民間的ケアの実態－非専門職による助言の分析から－，母性衛生，42(4)，528-538，2001
- 13) 松岡恵：周産期ケアにおける家族援助，日本看護科学会誌，15(1)，9-13，1995
- 14) 坂田三允編：日本人の生活と看護，中央法規出版，28，1998
- 15) 松本清一：系統看護学講座18母性看護学，医学書院，449-450，1968
- 16) 青木康子，加藤尚美，平澤美恵子編集：助産学体系8 助産診断・技術学Ⅱ，日本看護協会出版会，48-51，1996
- 17) 田中久夫：箒とその俗信覚書－出産儀礼の中から－，日本文化史論叢，有坂隆道先生古希記念会発行，641-657，1991

- 18) Irene, M.B. and Margaret, D.J :Maternity & Gynecologic Care, 699, mosby, St.Louis, 1993
- 19) 小林隆監修：現代産科婦人科学体系1, 産科臨床解剖生理学 I a , 16, 中山書店, 1976
- 20) 田野保雄監修：新図説臨床眼科講座第5巻網膜硝子体疾患, 273, メジカルビュー, 2000
- 21) Chandice C. Harris, RN, MSN : The cultural decision-making model: focus-circumcision, Health Care Women, Int.6(1-3), 25-43, 1985
- 22) 前掲14) p 24